

戦国北条五代

黒田基樹

ゆうきまさみ
北条氏入門の決定版——待望の新書化。

太鼓判!

『新九郎、奔る!』の第一歩は、この本を手にとった瞬間に始まりました。小田原北条氏の事蹟と運命を知るにはもって来いの一冊であり、またこの新版では増補も充実して大満足であります!

ゆうきまさみ



戦国北条五代

黒田基樹

星海社

149



戦国大名北条氏（小田原北条氏、後北条氏とも称される）は、初代伊勢宗瑞（いせそうざい）（いわゆる北条早雲）が明応二年（一四九三）に伊豆に乱入してから、五代氏直（うじなお）が天正十八年（一五九〇）の小田原合戦で滅亡するまで、五代一〇〇年にわたって、関東に覇を唱えた、全国的にも有数の戦国大名である。宗瑞の伊豆乱入は、戦国時代の幕開けともいわれ、小田原合戦は、羽柴秀吉の天下一統を遂げるものであったから、北条氏五代の歴史は、まさに戦国時代そのものに一致していた。

北条氏は、一般的には、武田氏・上杉氏などに比べ、その知名度は低いが、戦国大名研究においては、最も中心的な存在にある。それは領国支配に関わる史料が、他のどの大名よりも、豊富に残存していることによる。そのため、はやく明治時代から、北条氏は戦国大名研究のなかで中心に位置している。そうした状況は、現在でも同様であり、北条氏を主題とした専門書は、他の大名に比して最も多く刊行されている。

しかし北条氏についての通史・一般書となると、それほど多くは存在していない。初代宗瑞について、杉山博氏の『北条早雲』、下山治久氏の『北条早雲と家臣団』がある。最近では、三代氏康について、山口博氏の『北条氏康と東国の戦国世界』が出された。小田原合戦については、相田二郎氏の『小田原合戦』、下山治久氏の『小田原合戦』があるが、北条氏全体を扱ったものは、鈴木良一氏の『後北条氏』があるにすぎない。これは、北条氏の領国支配を中心に叙述されたものであり、五代の政治動向については、簡略さは否めない。むしろ同書の刊行後に、五代の政治動向についての説明が大きくすすんでいる。

そのため本書では、そうした近年における研究成果を充分に反映させることを心がけ、北条氏五代について、政治動向を中心に叙述をおこなうことにした。本書によって、北条氏五代の動向が多くの方々にかみやすくなることにならう。なお領国支配については、三代氏康を題材にした『戦国大名の危機管理』（吉川弘文館）で論じているので、そちらを参照していただければ幸いである。

なお本書では、部分的に、直接・間接にいくつかの既発表の文章を下敷きにしているの
で、参考までにあげておく。

「小田原北条氏の成立」(『小田原市史通史編原始・古代・中世』第八章第一節)

「小田原北条氏権力の変質」(同右書第一三章第一節)

「豊臣政権との交渉」(同右書第一三章第二節)

「その後の北条氏」(同右書第一三章第四節)

「北条『新九郎』氏政について」(『戦国史研究』二一号)

「北条早雲の事績に関する諸問題」(『おだわら』九号)

「北条早雲」(『歴史読本』平成九年三月号)

「北条早雲の戦い」「早雲、下剋上の背景」「公方権力を背景にした氏康の領国拡大」(歴史

群像シリーズ『戦国合戦大全 上巻』)

(新版にあたって)

本文には、逐一史料典拠を示した。これはあくまでも専門的に調べようとする方々のためのものである。そのため、一般の方々には煩雑であろうから、遠慮なく読み飛ばしていただくようお願いしたい。ちなみに、北条氏関係の基本史料集である、『戦国遺文後北条氏

編』『小田原市史史料編』中世に収録されているものについては、その史料番号を、戦く・
小くによって示している。

第一章
伊勢宗瑞

一 宗瑞の台頭 22

伊勢宗瑞の出自 22

宗瑞の年齢への疑問 24

北河殿との関係 25

宗瑞の実際の生年 27

今川氏との関係 29

駿河への下向 31

宗瑞の出家 33

伊豆乱入の背景 35

伊豆平定 37

二 相模西郡への進出 40

小田原城奪取の通説への疑問 40

小田原城奪取の時期 43

弟弥次郎 45

関東での軍事行動 46

宗瑞の軍事行動の性格 49

小田原と苅野荘 51

宿老松田氏の出自 53

松田郷と河村郷 55

小田原衆の編成 58

永正三年の西郡検地 60

三 相模経略 63

扇谷上杉氏への敵対 63

相模・武蔵への侵攻 65

相模を経略 67

房総への渡海 70

宗瑞の隠居 72

宗瑞の死去 75

早雲寺殿廿一箇条と伊勢宗瑞十七箇条 75

宗瑞の妻 77

宗瑞の子女 79

北条氏時 80

葛山氏広 83

長松院殿と青松院殿 86

北条氏綱

一 相模国主化と武蔵への進出 90

氏綱の登場 90

虎の印判 92

虎の印判創出の意味 93

「調」の印判 95

代替わり政策の展開 96

代替わり検地と安堵 98

北条改称 100

江戸城の攻略 102

扇谷上杉氏との攻防 105

小弓公方勢力の分裂 108

河越城を攻略 111

二 関東管領職の獲得 114

河東一乱 114

第一次国府台合戦 117

関東管領職と足利氏御一家 119

支城制の展開 121

鶴岡八幡宮の造営 124

氏綱の死去 126

氏綱の妻 126

氏綱の子女 128

第三章

北条氏康

131

一 北条氏康の関東経略 132

氏康の登場 132

氏康の元服・初陣・婚姻 133

氏康の家督継承 136

河越合戦 137

扇谷上杉氏の滅亡 139

山内上杉氏の没落 140

古河公方足利義氏の擁立 144

甲相駿三国同盟 147

氏康の隠居 149

二 上杉謙信・武田信玄との抗争 151

長尾景虎（上杉謙信）の来攻 151

関東管領上杉政虎（謙信） 153

関東支配をめぐる攻防 154

相次ぐ国衆の従属 156

相模守受領と「武栄」朱印 158

第四章

北条氏政

171

一

北条氏権力の変質 172

氏政の登場 172

甲相同盟の復活 176

上杉氏との攻防 178

関宿城攻略 181

公方勢力の統一 183

越相同盟の展開 160

武田氏との抗争 163

氏康の死去 165

氏康の妻 167

氏康の子女 168

北関東諸将との抗争 184

佐竹氏勢力の「一統」 186

御館の乱と上野支配権 188

武田氏との対戦 191

二 中央政権との接触 193

織田政権への従属 193

家督の交代 195

武田氏の滅亡 198

神流川合戦 201

徳川家康との同盟 204

上野・下野への進攻 206

古河公方の断絶 208

氏政の妻 210

氏政の子女 211

三 氏政兄弟衆の動向 214

氏政兄弟衆 214

氏照の登場 214

通称と本抛の変遷 216

氏照の動向 218

氏照の妻子 221

氏邦の登場 224

氏邦の動向 226

氏邦の上野支配 227

小田原合戦後の氏邦 229

氏邦の妻子 231

氏規の登場 232

氏規の支配領域 234

氏規の葦山城在番 236

第五章

北条氏直

241

一 羽柴政権との交渉 242

氏直の登場 242

藤岡・沼尻合戦 244

伊達政宗との連携 247

下総作倉領の併合 248

徳川家康との対面 250

惣無事令の発令 253

諸城大普請 255

人改め令の発令 259

軍備の充実化 261

籠城体制の構築 263

籠城体制の矛盾 266

二 小田原合戦 268

羽柴政権への従属へ 268

北条氏規の上洛 269

沼田領問題の裁定 271

名胡桃城奪取事件 274

交渉の決裂 276

小田原合戦 278

小田原城の開城 282

北条氏の滅亡 284

三 その後の北条氏 286

氏直の高野山蟄居 286

氏直の大坂出仕と死去 288

氏直の妻子 290

羽柴氏家臣北条氏規 291

氏規の妻子 292

狭山藩祖北条氏盛 294

御一家衆のその後 297

重臣たちのその後 300

増補 305

1 伊勢盛時と足利政知 306

2 小田原北条家の相模経略

——戦国時代の到来——

311

伊勢宗瑞の登場 311

塀和家という存在 316

小田原城の攻略時期 319

伊勢宗瑞の相模経略 322

扇谷上杉家との抗争 323

三浦道寸との攻防 326

戦国大名としての領国支配 329

3 北条綱成の父母 332

4 小田原落城後の北条氏一族 337

戦国北条五代・新書版あとがき 344

主要参考文献 348

北条氏系図 354

第

一

章

伊勢宗瑞



伊勢宗瑞（北条早雲）画像 国重要文化財 神奈川県箱根町・早雲寺蔵

一 宗瑞の台頭

伊勢宗瑞の出自

伊勢宗瑞は「北条早雲」の名で呼ばれることが多いが、すでに広く知られているように、宗瑞自身が「北条」名字を称したことはなく、「伊勢」名字が「北条」名字に改められるのは、子の氏綱うじつなの時のことである。また「早雲」というのは、「早雲庵」という出家後の庵号を略したものであり、出家後に称した法名が「宗瑞」である。当時、宗瑞は、領国支配等のために発給した文書にも「宗瑞」の法名で署名しているように、彼が正式に用いた名は「宗瑞」であった。歴史上の人物の呼称については、当時の名字と実名（あるいは法名）を合わせて呼称するのが妥当であるため、以下では、もはや「北条早雲」という呼称は用いず、「伊勢宗瑞」の名を用いる。

宗瑞の出自については、すでに江戸時代初期から明確ではなくなっていたようで、諸説が存在している。一般に宗瑞の出自については、備中伊勢氏説・京都伊勢氏説・伊勢素浪人説があり、その生国については、備中国説びっちゅう・山城国京都説やましろう・同宇治説・大和国在原説・

伊勢国説がある。しかしこれらは、江戸時代における諸説をもとに明治時代以降の研究者によって整理されたものであり、生国と住国の混同、伊勢氏の出自と宗瑞の出自の混同等、必ずしも正確な整理とはいえない面もみられる。実際に江戸時代前期に成立している良質の系図・軍記類にみえているものは、備中国出身、伊勢氏の本宗家である室町幕府政所執事伊勢貞親さだちかの近親とするのがほとんどである。具体的な出自をみると、備中伊勢盛定の子盛時の後身さだとぎ（「続群書類従」所収伊勢系図）、伊勢貞親の子貞辰さだとぎの後身（「続群書類従」所収伊勢系図別本）、貞親の弟貞藤の子（「異本小田原記」）、貞親・貞藤の一族貞通（貞雅、貞親の父貞国の従兄弟）の子（「続群書類従」所収伊勢系図・「北条五代記」）、とされている。また母を貞国（貞親の父）の娘と明記するもの（「寛永諸家系図伝」所収北条系図）、貞親の甥で「盛時」の子とするもの（「今川家譜」）もある。

つい近年まで、宗瑞の出自について通説的な位置を占めていたのは伊勢素浪人説であったが、これは実際には明治時代になって唱えられたものであった。逆に近年における関係史料の発掘、実証研究の進展にともなって、現在においては、備中伊勢盛定の次男伊勢新九郎盛時の後身で、母は伊勢氏本宗家の伊勢貞国の娘で、貞親・貞藤らの甥にあたる、とする説がもつとも有力視されている（小和田哲男『後北条氏研究』他）。これに対して有力な反

証がみられないことから、宗瑞の出自についてはこの説がほぼ確定的となっている。そして最近になって、家永遵嗣氏によって、『室町幕府將軍権力の研究』(他)、盛定・盛時父子と駿河今川氏との政治的關係が明確化されたことによつて、さらに確実なものとしてされている。なお宗瑞の実名については、長氏・氏茂・氏盛などという所伝もあるが、それらの実名が当時の史料にみられないことはいうまでもなく、それらの実名は、いずれも江戸時代に宗瑞の系譜を作成する過程で生まれた可能性が高い。

宗瑞の年齢への疑問

宗瑞は、通説では永享えいぎょう四年(二四三二)生まれとされている。これは宗瑞の享年を八十八歳とする記載から逆算したものである。これでは宗瑞が盛定の子、貞親の外甥という系譜關係も成り立たなくなってしまう。またその後の動向からみても、この年齢にはあまりにも難点が多すぎる。しかしこの宗瑞の年齢については、当時の史料にその旨が記載されているのではなく、実際にその旨の記載がみられるようになるのは、江戸時代中期の享保十年(一七二五)成立の軍記物「関八州古戦録」や、江戸時代後期成立の「寛政重修諸家譜」所収北条系図などまで下るものとなる。最も早いとみられるものも、天和年間(一六八

一〇四)以降の成立の「伊勢系図」(『続群書類従』卷一四二)であろう。

ところがそれより以前の江戸時代前期に成立した、「寛永諸家系図伝」所収北条系図をはじめとする各種の北条氏系図や、「異本小田原記」「北条五代記」などの北条氏を主題とした軍記物には、宗瑞の年齢の記載は一切みられない。それらの史料には、宗瑞の子氏綱以降の歴代については享年の記載がみられているが、北条氏五代のうち初代の宗瑞のみ享年に関する記載がない。このことは、すでに江戸時代前期において、宗瑞の年齢が、その子孫でも不明となっていたことを示している。そしてその後、宗瑞の年齢に関する新史料が発見されたとは考えられないから、江戸時代中期以降から登場してきた、宗瑞の享年八十八歳説というのは、一種の「創作」と考えられる。

北河殿との関係

宗瑞の享年八十八歳説が後世における「創作」であり、宗瑞の年齢が白紙の状態となると、現在の通説では宗瑞の妹とされている北河殿きたがわどの(今川義忠室)との兄弟関係についても、改めて確認する必要がある。北河殿を宗瑞の妹とする現在の通説も、宗瑞の享年八十八歳説に基づいて、明治時代になって唱えられたものであった。江戸時代前期に成立した

各種の系図・軍記物類をみてみると、いずれも北河殿は宗瑞の姉に位置付けられている。さらに今川氏側の「寛永諸家系図伝」所収今川系図や「今川記」などにおいても、いずれも北河殿は宗瑞の姉に位置付けられている。ちなみに小和田哲男氏は、内閣文庫本「宗長そうちょうき記」における北河殿についての「北条早雲の妹」という傍注の存在から、北河殿が宗瑞の妹であることの傍証としているが（『後北条氏研究』）、その注記は後筆であり、しかも「北条早雲」という表記の仕方から、かなり時代の下るものとみられ、そこに史料性を見出すのは困難といえる。

このように、北河殿は一貫して宗瑞の姉と所伝されており、したがってその所伝は事実を伝えたものである可能性が高い。むしろ宗瑞の享年八十八歳説そのものが成立しないことを踏まえれば、こうした江戸時代における一貫した所伝の存在や、北河殿の嫡子氏親（文明五年＝一四七三生まれ）と宗瑞の嫡子氏綱（長享元年＝一四八七生まれ）の生年の差などからみ

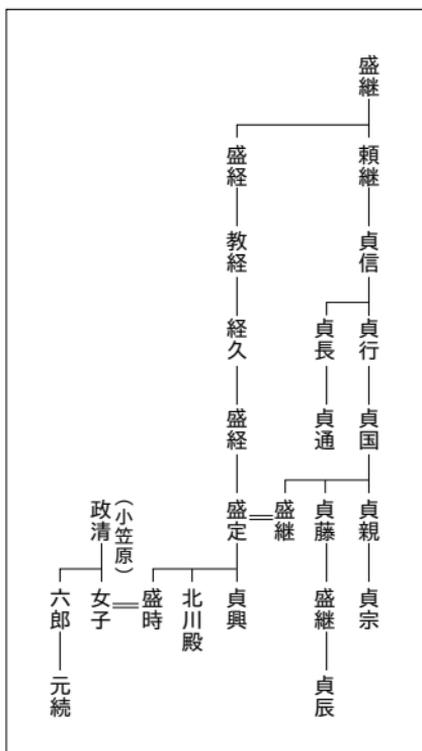


図1 伊勢盛時関係系図

れば、北河殿は宗瑞の姉であったとみるのが正しい。北河殿は、文明五年に嫡子氏親を生むが、それ以前に一女（三条実望室）を生んでいる。その年次は不明であるが、氏親出生の一、二年前、およそ文明三、四年頃と推定される。北河殿が今川義忠に嫁したのは、さらにその一、二年前のことと推測される。これについて小和田氏は、「今川記」の記述をもとに、応仁元年（一四六七）と推定しており、妥当なところとみられる。北河殿の年齢についても不明であるが、遅くみてこの時十五歳と仮定しても、享徳二年（一四五三）以降の生まれと推定される。したがってその弟である宗瑞は、早くても享徳年間（一四五二、五）以降の生まれと推定される。

宗瑞の実際の生年

宗瑞の年齢について、さらに特定することはできないであろうか。そこで注目されるのは、「異本小田原記」「北条五代記」という比較的信頼性の高い軍記物に、宗瑞は子年生まれとする記載がみえていることである。これは軍記物にみえる記載であり、どこまで事実を伝えたものであるのか不安もある。しかしそれらの史料には、宗瑞の享年についての記載はみられないから、生まれの干支のみ傳承されていた可能性が想定され、むしろそれゆ

えにこそ事実を伝えているとも考えられる。享徳年間に最も近い子年は、康正二年（一四五六）である。他に宗瑞の年齢を特定できる材料がみられないから、軍記物にみえる所伝ではあるが、ここではあくまでも仮説として、宗瑞の生年は康正二年とする説を提示してきた。通説の年齢からは、二十四歳下回るものとなり、その享年は六十四歳であったと推定される。この仮説に基づいて、以後における宗瑞の動向を照らし合わせていくと、年齢的には全く無理のないものとなる。宗瑞については、よく大器晩成などと評されることが多いが、全くの誤りとなる。

ついでながら、宗瑞の享年八十八歳説成立について若干の所見を述べておきたい。まず八十八歳という年齢そのものが、米寿という長命を祝うものであり、すでに江戸時代前期においてその事績が伝説化していた宗瑞の年齢に、そうした長命の祝年があてられたともみられる。またその生年にあたる永享四年は、実は、江戸時代において一部に宗瑞の父に比定されていた伊勢貞藤（文明十四年に五十一歳、延徳三年一四九一死去）の生年であった（大塚勲「北条早雲の年齢について」）。宗瑞はこの貞藤の子、あるいは孫とする説が江戸時代中期には成立しているが、それはこうした宗瑞の生年が貞藤のそれと混同されたことと大いに関係していたのではないかとみられる。ただし、宗瑞と貞藤との系譜関係の成立が先か、

宗瑞の永享四年生まれ説の成立が先かは、検討する必要がある。さらに仮に、八十八歳説に典拠が存在したとして、実際には「八八」と記載されていたとすれば、これは「八・八」、すなわち八×八＝六十四を示すこととなり、これは、先に子年生まれの所伝に基づいて推定した、康正二年生年説の結果にちょうど一致することになる。いずれにせよ、宗瑞の享年八十八歳説というものは、多くの所伝が複雑に絡み合っただけで伝承されてきたものであつたとみられる。

今川氏との関係

宗瑞の父伊勢盛定は、伊勢氏の一族で備中国荏原郷（岡山県井原市）等を所領とした備中伊勢氏の庶子で、本宗家の伊勢貞国の娘、すなわち貞親の姉妹を妻としていた。そのため、備中伊勢氏の庶子とはいいいながらも、本宗家ときわめて密接な関係にあつた。盛定ははじめ新左衛門尉、次いで備中守、備前守を称した。このうち備中守の受領名は、本宗家の子弟など、伊勢氏においては本宗家に次ぐ政治的地位にある人物が名乗っており、このことから盛定が、本宗家にとって重要な政治的位置を占めていた存在であることがうかがわれる。これは盛定が、貞親の義弟であつたことに拠つていよう。そして、盛定のあとの備

中守の受領名は、貞親の弟貞藤に継承されている。盛定の事績のなかで注目されるのが、伊勢本宗家と駿河今川氏との間にあって、本宗家から今川氏宛に出される文書の文案作成を行うなどの取次の役割をつとめていることである。盛定の娘（盛時の姉、後の北河殿）が、応仁元年頃に今川義忠の正室となるのも、そうした政治的関係に基づいていた。

宗瑞の前身である伊勢盛時は、盛定の次男とされている。ただし、兄とされる貞興の動向は全く知られていないようであるから、盛時は早くからその嫡子の立場にあったとみられる。そして文明三年（一四七二）六月二日に、備中国荏原郷内に所在し、菩提寺である長谷法泉寺（同県井原市）に禁制きんぜいを下している（「法泉寺文書」小II四〇）。これが盛時の史料上における初見である。康正二年誕生説に基づけば、時に十六歳である。次いで「賦引付くぼりひきつけ」同十三年九月十八日条（小I二九二）に「伊勢新九郎盛時」の名がみえる。そして同十五年十月十一日に、室町幕府九代將軍足利義尚あしかがよしひさ（義政の子）の申次衆もうしつぎしゅうとなり（「慈照院殿年中行事」小I二九三）、長享元年（一四八七）四月まで、申次衆としての活動をみる事ができる（「親長卿記」小I二九四）。さらに明応元年（一四九二）から同二年頃までには、室町幕府將軍の直属軍を構成する、奉公衆になっている（「東山殿時代大名外様附」小I二九六）。

駿河への下向

これより以前の応仁年間（一四六七〜九）に、宗瑞は伊勢に下つて今出川殿足利義視（義政の弟、義尚の叔父）に仕え、その後尾張に移り、さらに義兄今川義忠を頼つて駿河に下向したという。そして、そのまま駿河に滞留し、文明八年の義忠死後における今川氏の家督相続をめぐる内乱において、姉北河殿・甥竜王丸（氏親）を助けて、その調停に大きな役割を果たし、乱後にその功賞として竜王丸から駿河国富士郡下方荘（静岡県富士市）と駿東郡興国寺城（同県沼津市）を与えられた、と伝えられている（「異本小田原記」など）。この所伝は、宗瑞の今川家中における華々しい台頭を伝えるものであるが、先に述べた前後における京都での活動と整合性がみられない。さらにその年齢の若さとも相まって、多分に伝説性が感じられ、史実としては大いに疑問が残る。

むしろ長享元年十一月に、義忠の死後に実際に今川氏の家督の地位にあった、今川小鹿新五郎範満（義忠の従弟）が死去しており、これが竜王丸側による攻撃の結果による敗死とするならば、宗瑞による今川氏の内乱の調停、下方荘・興国寺城の拝領という所伝は、この事件に際してのものともみるほうが妥当であろう。先の所伝に関しては、文明八年の今川氏の内乱について記す「鎌倉大草紙」には、宗瑞の名は登場していない。またそれらの軍

記には、この長享元年の事件については全く記述されていないので、先の所伝は、この二回にわたる今川氏の内乱を混交して作成されたものであったと考えられる。文明八年の今川氏の内乱における宗瑞の活躍というのは、なかったとみるのが妥当である。これらのことから、宗瑞は長享元年の四月から十一月までの間に、甥竜王丸の今川氏家督継承の実現のために、駿河に下向してきた、とみられる。時に三十二歳であった。

そもそも今川範満による家督継承は、堀越公方足利政知（義政の庶兄）と相模国守護扇谷上杉氏の家宰太田道灌の支持をえて成されていた。範満敗死の前年の文明十八年七月に、扇谷上杉氏における内訌により、道灌が主君上杉定正によって謀殺され、この事件を契機に、関東では扇谷上杉氏と関東管領山内上杉氏との抗争（長享の乱）が勃発した。道灌という強力な後ろ盾を失ったため、範満の権力は不安定化したとみられる。宗瑞は、こうした状況を踏まえて駿河に下向し、反範満勢力を糾合して一気に範満を討滅し、氏親の家督継承を実現させたとみられる（家永遵嗣「明応二年の政変と伊勢宗瑞（北条早雲）の人脈」）。

ちなみに先の下方荘・興国寺城拝領についても伝承の域は出ず、史料によって確認することはできない。興国寺城の築城も、後の天文十八年（一五四九）のことであり、しかもその所在は駿東郡であるから、下方荘の支配拠点にはそぐわない。下方荘の支配拠点として

相応しいのは、善得寺城であるから、同荘拝領が事実とすれば、その支配拠点として拝領したのは善得寺城であつたと考えられる（大塚勲「今川義元那―史料による年譜的考察」）。これに対して、駿河時代における宗瑞の在所として確認されるのは、西駿河の石脇城（静岡県焼津市）である（鈴木文書「戦四一四五」）。氏親は、駿河府中館に入部する以前は、西駿河の丸子（同県静岡市）に居住していたとされ、石脇城はその近所にあたることから考えると、宗瑞は、氏親の駿河府中館入部の前後頃に、同城に在城していたとみられる。

宗瑞の出家

宗瑞は、氏親の外叔父という姻戚関係に加え、

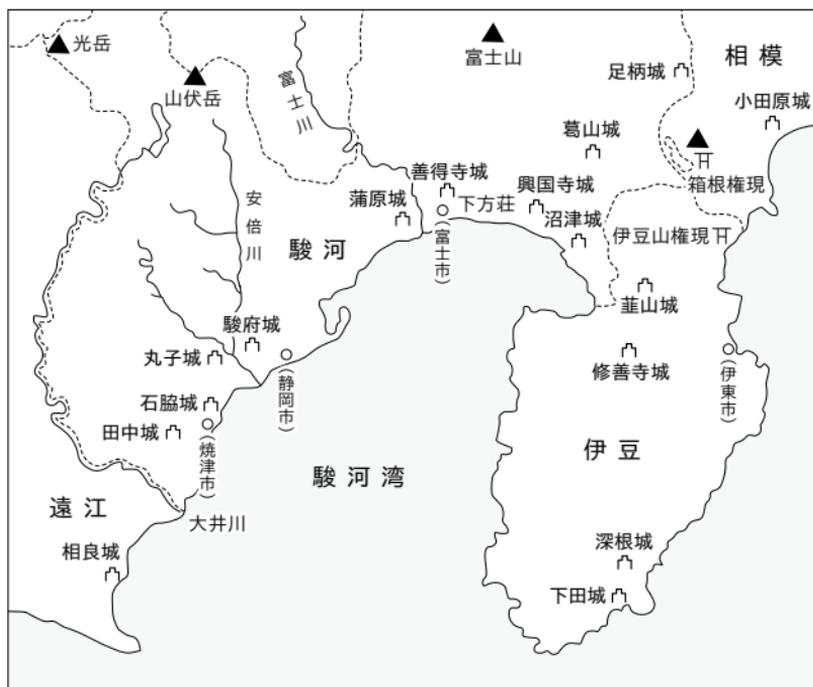


図2 伊豆・駿河の城郭分布図

そうした氏親の今川氏家督継承における功績により、今川氏家中において台頭し、氏親を支える中心的存在となったとみられる。宗瑞は、駿河下向後の延徳三年（一四九二）五月まで、「伊勢新九郎」の名で見えているが（「北野社家日記」小一二九二）、明応四年（一四九五）二月の初見発給文書（「伊東文書」戦二）では法名宗瑞で署名しており、以後は早雲庵宗瑞と称している。宗瑞が、延徳三年五月から明応四年二月までの間に、出家したことが知られる。その契機については確かではないが、その間の明応二年に、後述するように伊豆乱入を果たしていることをみると、この伊豆乱入を契機として出家したのではなかったか。出家は政治的転機にともなつて行われる場合が多い。宗瑞にとつて伊豆乱入はまさに大きな政治的転機であった。そしてこの出家は、一方では幕府奉公衆からの退任とそれにともなう幕府への出仕の停止を意味した。すなわちそこには、幕府権力からの明確な自立という背景が存在した、とみることができるといえる。なお宗瑞の法名は、臨済宗大徳寺系のものである。宗瑞は、幕府への出仕期に、初め京都東山の臨済宗建仁寺で禅を学び、次いで文明十三年以降のある時期に、京都紫野の大徳寺に参じ、住持春浦宗淵のもとで禅を学んでいた（「東溪宗牧語録」「玉隠和尚語録」小一三二八・三五〇）。

伊豆乱入の背景

宗瑞が今川氏家中から相対的に自立し、戦国大名へと転身を遂げていく、もつとも大きな政治的転機をなしたのは、やはり伊豆平定であろう。文明十四年（一四八二）の室町幕府・堀越公方足利氏Ⅱ関東管領山内上杉氏と古河公方足利氏との和睦である「都鄙和睦」のうち、伊豆は堀越公方足利政知の分国とされていた。政知が延徳三年（一四九二）四月に死去すると、その家督をめぐる内訌が生じ、七月に長男茶々丸ちやちやまるが継母円満院（武者小路氏）・異母弟（政知三男）潤童子じゆんどうしを殺害し、実力でもってその家督を継承した。

しかしその後においても内訌は収まらず、明応年間（一四九二～一五〇二）になって、茶々丸は外山・秋山両家老を殺害し、「豆州騒動」といわれる状態となったという（鎌倉九代後記「他」）。そうした伊豆における内乱状態に乗じて乱入したのが宗瑞であった。この宗瑞の伊豆乱入時期については、延徳三年とするのが通説であったが、小和田哲男氏は、「勝山記」（小一二九七）に基づいて明応二年のことであることを明らかにした（『後北条氏研究』）。またこの事件は、通説的には、宗瑞は当初から関東経略の野望を抱いており、そうした宗瑞の領国拡大という野心に基づいたものとして、その下剋上の性格が強調されてきた。しかし当時の宗瑞の政治的な立場からみると、その行動は今川氏の政治行動の一環としてなさ

れたものであることはいうまでもない。さらに最近では家永潤嗣氏によって、宗瑞の伊豆乱入は、同年四月に京都で勃発した幕府管領細川政元によるクーデターと連動してなされたものであることが明らかにされた（『室町幕府將軍権力の研究』）。

細川政元のクーデターというのは、將軍足利義材（義植、義視の子）を廃し、義高（義澄）を新將軍に擁立した事件である。義高は、実は政知の次男清晃（母は円満院）であり、政知死後の内訌を克服して家督を継承していた兄茶々丸は、彼にとつてはいわば母と弟の敵にあたる存在であった。しかも堀越公方権力のなかでも、幕府・関東勢力双方に対して、路線をめぐる対立があり、それが政知派と茶々丸派との対立、そして明応年間からの内乱の勃発として表現されていたとみられる。氏親・宗瑞は中央政界については細川政元と親密な関係にあり、堀越公方との関係では政知派と親密な関係にあった。今川範満方は茶々丸派と繋がっていたから、そのため範満討滅により、茶々丸派との関係が悪化していたようである。しかも宗瑞が、東駿河の富士郡下方荘を支配していたとすれば、そうした伊豆の内乱状況は直接に影響を被るものであったとみられる。宗瑞は、中央における細川政元による政変に乗じて、伊豆に乱入し、対立勢力の一掃を図ったのではなからうか。

さらに実際の伊豆乱入は、周辺地域における領主間の対抗関係とも連関して行われた。

当時、関東では関東管領山内上杉顕定と相模国守護扇谷上杉定正による抗争（長享の乱）が展開されていた。伊豆は山内上杉氏の勢力圏であり、同氏は茶々丸支持であった。そのため宗瑞は、乱入にあたって扇谷上杉氏との連携を成立させている。そして隣国甲斐でも、守護武田信繩のぶつなと父信昌のぶよし・弟信恵による内乱が展開されており、氏親・宗瑞は、この武田氏の内乱にも介入し、信昌・信恵を支持していた。氏親・宗瑞も、すでに周辺領主の對抗関係と密接に関わっていたのである。乱入後に、茶々丸は国外に逃亡するが、そこでは山内上杉氏・武田信繩から庇護をうけることとなる。これはそれらの對抗関係に基づくものであったとみられる。また長享の乱は、延徳二年以来、一時的な和睦が成立していたようであるが、この翌年の明応三年七月から抗争が再発されている。これは宗瑞の伊豆乱入ともなつてのこととみられる。宗瑞の伊豆乱入が、関東における内乱状況を刺激し、長享の乱の再発の契機を成したのであろう。そのこと自体、宗瑞の行動が、長享の乱の展開のなかに組み込まれていたことを示している。

伊豆平定

宗瑞の伊豆乱入は、今川氏や上杉定正の援助を得て行われた。今川氏からは、駿東郡の

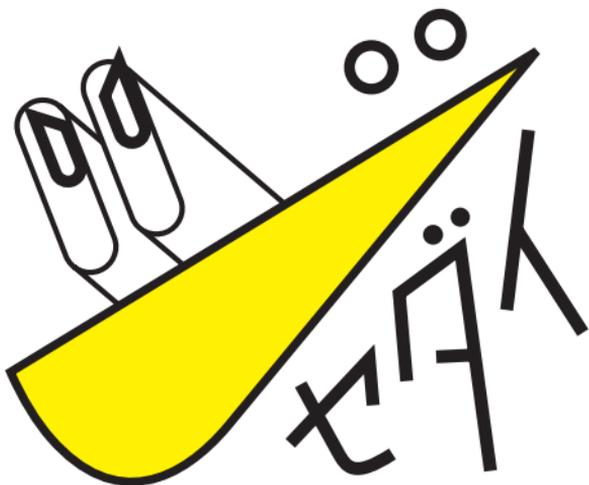
国衆である葛山氏かずらやまらが動員された。葛山氏は、同郡中部の葛山城（静岡県裾野市）を本拠に、同郡中部から南部にかけて支配する国衆で、今川氏に従属していた存在であった。宗瑞は、この葛山氏の娘を妻の一人としているから（「豆相記」）、両者は親密な関係にあったとみられる。このことから伊豆乱入は宗瑞単独の行動ではなかったことがわかる。それはあくまでも、今川氏の軍事行動であった。

伊豆に乱入した宗瑞は、堀越御所を攻略したとみられ、そして明応四年には、足利茶々丸を「島」（伊豆大島であろう）に没落させて、国外に追放し（「勝山記」）、伊豆への進出を果たした。そして菰山城（同県伊豆の国市）に移り、同城を本拠と定めた。これは、伊豆国主堀越公方足利氏の没落と、それにかわる宗瑞の登場を明確に示す事柄であった。この後、宗瑞は「豆州ずしゅう」と称される。いうまでもなく、これは伊豆国主に対する呼称である。ここに宗瑞は、伊豆国主としての政治的地位を獲得し、いわば戦国大名への仲間入りを遂げた。しかし伊豆一国そのものの平定は、たちには達成されなかった。通説では、茶々丸は伊豆乱入の際に滅亡し、宗瑞による伊豆平定もわずか一ヶ月で遂げられたとされている。しかしその後においても、国内には茶々丸方勢力が残存しており、その抵抗をうけ、明応六年までは国内が戦乱状態にあったことが明らかにされている（小和田哲男『北条早雲とその

子孫』他)。一方、茶々丸についてもその後における生存が確認されている。先に述べたように、明応四年に国外に逃亡するが、その後は山内上杉顕定・甲斐武田信繩の後援を得ながら、武蔵から甲斐郡内ぐんないに居留しており（『勝山記』）、伊豆奪回の機会をうかがっていた。そして明応七年八月に、茶々丸は宗瑞の攻撃により、甲斐で滅亡したことが明らかにされている（家永遵嗣『室町幕府將軍権力の研究』）。

この間、宗瑞は明応三年九月から十月にかけて、上杉定正の援軍として相模・武蔵に出陣して顕定方と戦い（『鎌倉大日記』「石川忠総留書」小I三〇〇・三〇一）、同四年には甲斐に出陣して武田氏と戦い（『勝山記』小I三〇三）、同五年七月には、扇谷上杉朝良（定正の養嗣子）の援軍として、弟弥次郎を相模に派遣して顕定方と戦っている（『伊佐早謙採集文書』「勝山記」小I三〇八・三〇九）。これらは長享の乱の一環としての軍事行動であると同時に、宗瑞にとっては茶々丸追討の一環でもあった。そして同七年八月、宗瑞は甲斐に進攻し、ついに茶々丸を自害に追い込んで、名実共に堀越公方足利氏の討滅に成功した（『王代記』小I三二一）。これにより、茶々丸方勢力の抵抗も終息をみたようで、乱入以来六年の歳月を費やした末に、伊豆一国の平定に成功した。

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!